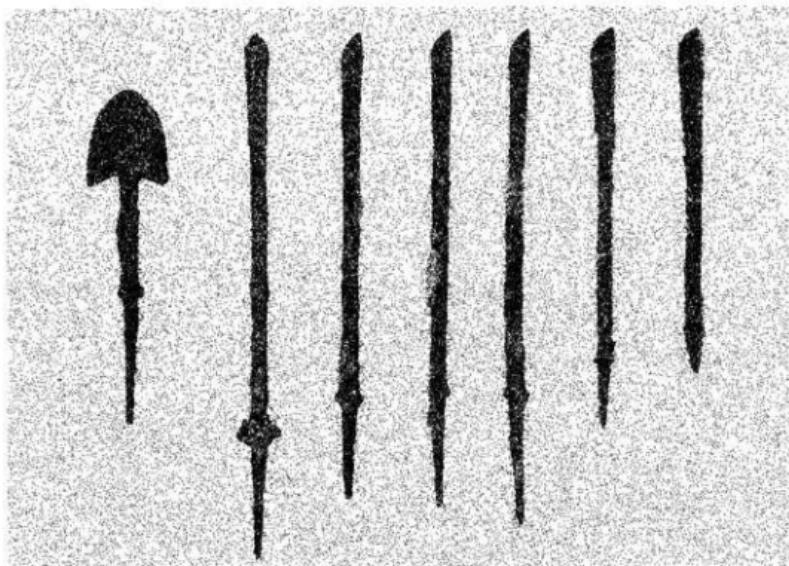


# 研究紀要

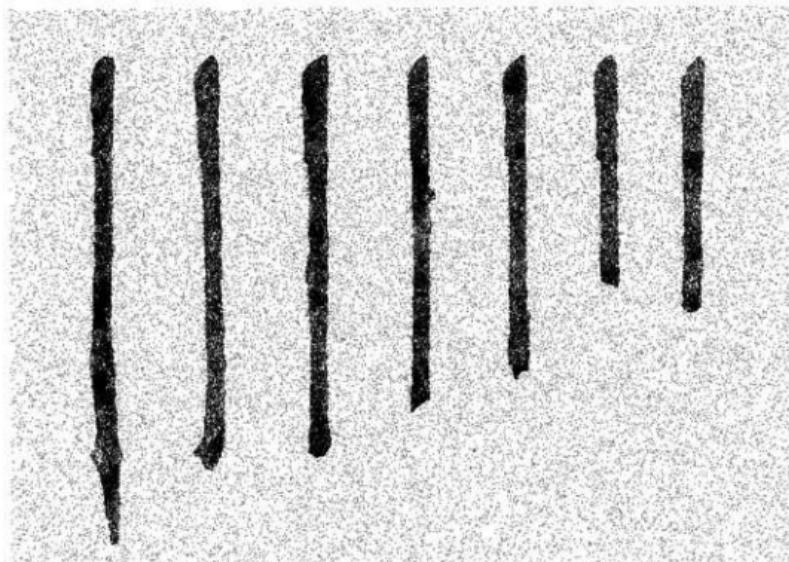
第 10 号

1993

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

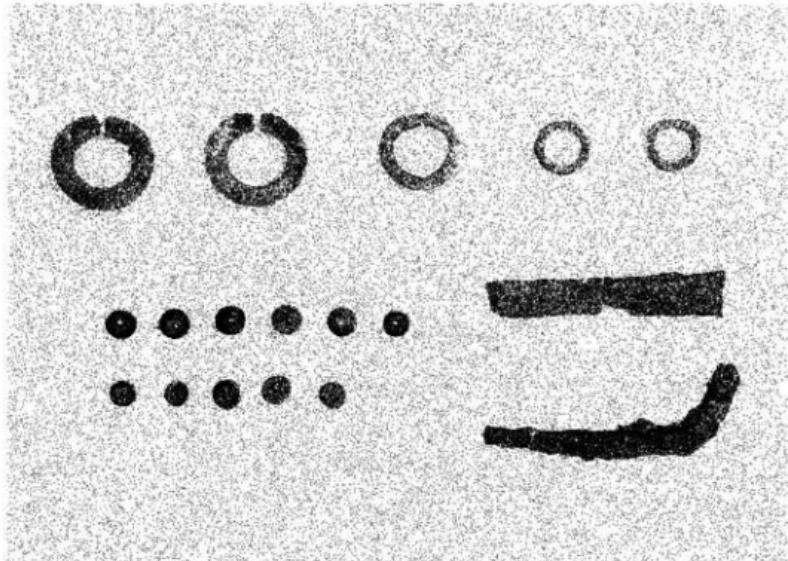


1 毛呂山町川角15号墳 鉄鏃 (1)

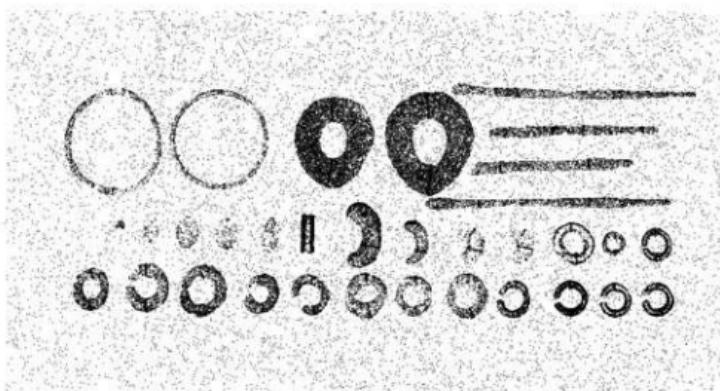


2 毛呂山町川角15号墳 鉄鏃 (2)

図版2



3 毛呂山町川角15号墳 装身具・鉄製品



4 毛呂山町大類古墳群出土遺物

# 目 次

## 序

### 〈論文〉

- 子母口式新段階「木の根A式」土器の再検討 金子 直行……( 1)  
—細隆起線文土器の出自と系譜を中心として—
- 羽状縄文系土器の紋様構成（点描） 2 黒坂 権二……( 45)
- 遮光器系土偶についての考察 浜野美代子……( 83)
- 方形周溝墓出土の木製品 野中 仁 福田 聖……(113)
- 吉ヶ谷式集落の展開 石坂 俊郎……(159)
- 埼玉県域の出現期古墳における土器祭式の様相 山本 靖……(181)
- 東国における終末期古墳の基礎的研究（2）  
田中広明 大谷 徹……(203)
- 腰帶の一考察 田中広明……(245)
- 北武藏の古代通路について 井上尚明……(257)

# 北武藏の古代交通路について

## —集落を結ぶ道・主要生活道の復元—

井 上 尚 明

**要約** 近年日本各地で古代の道路遺構の調査が相次ぎ、ようやく考古学からも検討が進められようになったが、歴史地理や古代史からの研究は古くから行われており、その蓄積はかなりのものになっている。道路跡の発掘を契機に、考古学の分野でのアプローチはようやく始まったばかりであるが、1992年には古代史の研究者を中心とした、古代交通研究会も設立され、各分野での討論が進められている。本論では、これらの最近の成果を参考にし、東山道武藏路の沿線周辺、特に北武藏地域をケーススタディーとして、政治的な要素を中心の官道ではなく、集落と集落を結ぶ生活道路の復元を目的として検討してみたい。ここでは、官道である東山道武藏路の存在にとらわれないで、周辺集落の分布や出土遺物から、集落間を結ぶ主要生活道のルートとこれに繋がる主な支線を復元し、改めて東山道武藏路とどのような関係にあったか考えてみたい。

### はじめに 一道路について思ったこと—

数年前調査した遺跡を久しぶりに訪れたが、沿道の景色や以前の通勤路の様子がだいぶ変わっているのにとまどった。わずか数年の間に道幅が広がり、水田が埋め立てられて住宅地になり、景観の移り変わりの早さには驚くばかりである。道路ができるとその沿線に住宅地が造られ、さらに住宅地と住宅地を結ぶ道路ができ、これを繰り返して街が広がっていく。この間にも道路は拡幅され区画整理が進み、さらにバイパスが計画されて生き物のように変化していくのである。現在では道路による便利さと引き替えに、多くの代償を支払っているが、道路を造る是非についても、子供の交通事故多発に悩んだ国では、道路を整備する代わりに交差点を意図的に凹凸にして、車のスピードをだせないようにしたという話を聞いたことがある。インドでもこれと同じようにバンバーという施設を交差点に設け、自動車が徐行するようにしたという。このような発想は車優先の現代の日本では出てこないのであろう。

道路に関する意識や考えも各時代や国によって画一的ではない。たとえば現在の上海では東西は都市名、南北は省名を冠した、たとえば南京路というような道が基盤の目のように整然と走っているが、一步旧市街に入り込むと曲がりくねった細い道がうねうねと続いている。これは、建物を造り続けた結果その隙間が道になったような、道路と建物の関係が我々の感覚とはネガとポジのように反転してしまった印象さえ覚えるのである。このように、一つの都市の中でも対称的な新旧の道のあり方を見る所以である。

現在では、舗装道路・自動車のための道路という考えが当たり前の日本でも、一世代前には砂利道や雨が降ればすぐにぬかるみになる道はどこにでもあった。そして、番号だけの付いた道路ではなく、多くの道に○○街道あるいは○○道という固有名詞があった。道のカタチと、人から自動車

へと利用対象がかわったのはつい数十年前からのことである。それ以前の道の先は、古代の道へと続いているように思えてならない。

## 1 東山道武蔵路とその周辺について

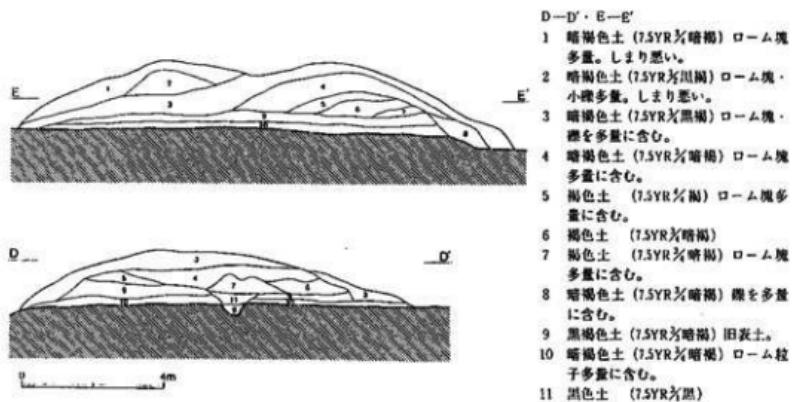
宝亀二年(771)に武蔵国が東山道から東海道に移るが、これ以前の東山道から武蔵国府に至る道は東山道武蔵路と呼ばれている。この東山道武蔵路については、概ね武蔵国府から直線的に北上するルートが有力視されている。ルートの復元は主に、鎌倉街道および地名などを参考にして想定され、これらに郡衙や寺院の存在を考慮して、最近ではさらに発掘調査の成果が加えられて検討されることが多い。しかし、沿線の集落群にどのような属性が備わっており、時期的にどのような特徴がみられるかと言うような検討は積極的にはなされていない。現在でも、国道や大きな県道の沿線には都市が発達するし、逆に都市間を結ぶために道路が整備され、バイパスが建設されている。当時の国道に相当するこの道も、国府から東山道まで無人の荒野を一直線に進んでいた訳ではなく、人の住む集落を結ぶ機能も有していたと考えることもできる。しかし、官道は村を結んだものでなく、沿道住民の利便に資することを第一義としているという指摘もあり、日常生活上どのような位置を占めたか明らかではない(武田1991)、とされている。

東山道武蔵路については、最近では現在の府中市から所沢市、坂戸市、東松山市、熊谷市を通って群馬県太田市を通過し、新田町付近で東山道に至るルートが想定されている(木本1992・荒井1993・酒井1993)。東山道武蔵路と考えられる実際の道路遺構としては、国分寺市恋ヶ窪遺跡、武蔵国分寺とその周辺、所沢市東の上遺跡で検出されており、また、群馬県では東山道関係遺跡の発掘が増加し、新田町下新田遺跡などがあげられる。今後もこのような道路遺構の調査例が増加すれば、点から線への復元作業も伸展するであろうが、現状では他の要素を手掛かりに傍証を固めていくばかりはない。

東山道武蔵路のルートは、これまでいくつかの案が発表されているが、ここで木本氏の説に関して部分であるが私見を述べておきたい。木本氏のルート決定の根拠と同様の説はその後酒井氏も述べているが、ルート復元に際して両氏とも川越市女堀II遺跡(立石1897)を引用している。この遺跡で検出された中世の堀である「女堀」について、これを群馬県牛堀の例などから古代道の側溝を拡張したものであると想定し、これを東山道武蔵路の一部に比定している。調査に関係した者として今更という気はするが、ここで所見を付け加えておきたい。調査当時は古代道に関する知識も認識もなく、特別に意識をしながら調査したわけではないが、結論から言えば、古代道の根拠としている女堀に平行する土塁下の溝については、古代の所産ではなく女堀・土塁と時期的に非常に近い遺構ではないかと考えている。覆土も同一遺跡内で発見された平安時代の住居跡の覆土よりも、中世の堀や溝の覆土に近いものであった。以下に簡単に女堀の変遷を新しい時代から記すと、調査直前まで女堀の土塁上は桜並木になり、堀の上面は道路になっていたが、周辺は住宅地となり、土塁や堀は調査区内でしか見ることはできない。周辺の道路や区画が女堀を意識しているのは、上面の江戸時代以降の道路の存在によるものである。堀の上層から中層までは江戸時代以降の陶磁器類が出土し、道路である硬化面は最上層でしか観察できなかった。堀を掘削した際の土を盛り上げた「土

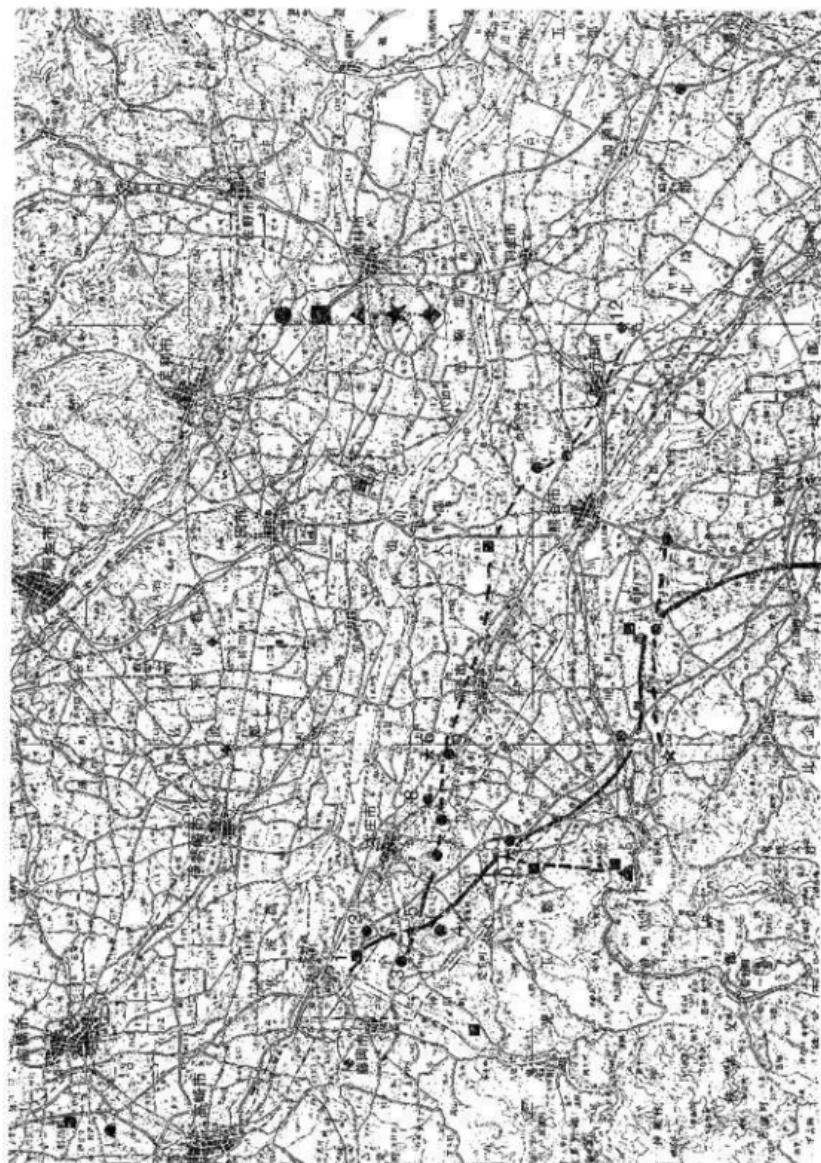
塁」の下面、つまり構築面である旧表土から、16世紀前後のカワラケや陶器などが出土している。この旧表土で問題となっている溝が検出されたのである。堀の下層からはほとんど遺物が出土しなかつたが、中層以上では陶磁器に混じって1・2点の須恵器小片がある。女堀の東で堅穴住居跡が1軒発見されており、遺物が出土しておらず時期不明であるが、規模や構造から一般的には奈良・平安時代と考えられ、この時期の堅穴住居跡に帰属する遺物であろう。須恵器が出土していることから、女堀の起源を古代に遡らすことを完全には否定できないが、女堀が該期の遺構を破壊して造られている点も否定できず、積極的に古代にすることには肯定はできない。

もう少し詳しく女堀を観察すると、土塁の構築方法については、一定区間区切って積上していく方法で、等高線を観察すると一つの工区が20mスパンであることが看取できる。溝は土塁の中央部直下に位置し、土塁構築と密接に関わるものと考えられる。おそらくは、区間工法のためのセンターとして掘削されたのではないかろうか。また、土塁と直接の関連はなくとも、土塁と溝が同時に観察できる断面図(図1)を見ると、溝の確認面つまり掘削面は土塁構築面でもある。土塁下には旧表土が良く残っており、溝は土塁構築時点の表土を掘り込んでいて、上面に表土は発達していない。さらに溝の覆土下層にはこの表土が堆積しているので、土塁構築時には溝はまだ開口していたことが想定できる。のことから、考古学的にはこの溝は土塁構築以前であったとしても、両者はかなり近い時期に掘削されたもので、古代の遺構とすることには無理があると言わざるを得ない。たとえ女堀と東山道武藏路が同一線上にあったとしても、土塁下のこの溝をその根拠とすることには賛同できない。しかし、今回の問題で、問題意識を持って調査されることの少ない溝を、このような新たな視点で捉える必要性を痛感した。今後の教訓としたい。



土塁土層断面図 (L = 28.00m)

第1図 女堀土層図



第2図 遺跡分布と推定陸路



## 2 主要生活道の復元

ルート復元に当たっては、東山道武藏路の推定ルートを特に意識しないで、交易や流通に使用されたであろう道路に相応しい遺構・遺物を抽出し、当時の地方都市の中心ともなる官衙や寺院、あるいは人や物資の集まる集落を結ぶルートを考えてみたい。

出土遺物については、道路と密接に関わるものとして、馬の存在に注目したい。馬の存在を立証できる遺物には、まず馬そのものの骨や歯が上げられる。馬骨の出土は希で、類例は少ないが、馬歯については多くの遺跡で検出され、祭祀との関連などを指摘されることが多い。さらに、馬の存在を間接的に裏付ける遺物には馬具があり、古墳以外での馬具の出土も近年増加しているので参考にしたい。道路や馬の存在を想定できるもう一つの要素には、墨書き土器を上げることができる。しかし、管見では関連する墨書き土器は坂戸市宮町遺跡の『路家』や群馬県菅谷村前・正観寺遺跡の『路』、川越市・日高市光山遺跡群の『馬』などその数は少なく、この他の『牧』や施設や機関を表すと考えられている『家』といった墨書きも付け加えておきたい。

さて、次に流通や交易を傍証できるような遺物であるが、これについては度量衡を基準に考えてみたい。一度一つまり、ものさしについては出土例がほとんどないため除外したい。一量一は、升に代表されるかさを計る道具で、これも秋田城跡(小松他1991)や平城京など7遺跡で検出されているに過ぎない(篠原1991)。しかし、唐招提寺境内経藏前井戸跡と平城京右京五条一坊五坪から量銘が記された須恵器コップ形土器が出土しており、この種の土器は全國的に分布しているため、これを流通などで使用された計量器と考えることもできる。須恵器コップ形土器を計量器として認識する論理については、別稿を用意してあるので、ここで詳しくは述べないが、土器としては小型で、すべての遺跡で出土するものではない。官衙・寺院あるいは規模の大きな集落などで特徴的に見られ、薬や穀物類の加工品などの計量に使用された土器と理解している。一衡一は所謂、はかりのことで、ものとしては棹秤を意味するものである。総称としての棹秤のうち、天秤棒や留金具の検出例は少ないが、おもりの出土例は増加し、特にこれまで砥石などと報告してきたものが、ようやく棹秤のおもりとして認識されるようになったので、これも全國的に確認されつつある。

遺構については道路遺構以外は、駅と想定される遺跡でさえも明確に特定できない現状では、官衙や寺院あるいは官衙に準ずるような規模の大きな集落遺跡を参考にして進めたいが、前述の遺物を出土する遺跡と重複する場合が多い。道路遺構としては、東山道武藏路の可能性が高い東の上遺跡の他に、狭山市宮ノ越遺跡・今宿遺跡、日高市向谷遺跡、鶴ヶ島市新山遺跡、坂戸市石井上宿遺跡、上里町中堀遺跡などで確認されているが、時期の不明な道路状遺構と報告されているものも多く、さらに認識の問題もあるので、今後調査例は増加することであろう。

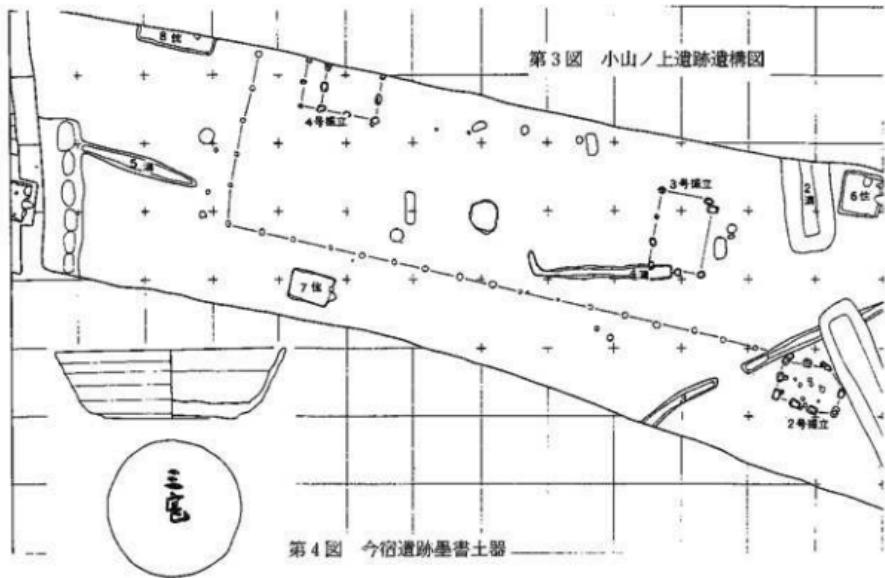
以上のような作業論理によって抽出した遺跡を地図上に落とし、基本的にはこれらの遺跡を結ぶことでルートを策定した。しかし、道路は当然1本ではないし、現在の国道や県道のようにいくつかのランクに分類できるであろうが、ここでは幹線となる主要道1本と、ここから派生するいくつかの支線の2種類とした(図2)。関連する遺跡については文末の一覧表に記載してある。また、地名やこれまでの説にとらわれないで、遺構・遺物を基本として検討している。

それでは、仮に武藏国府から上野国境までを4つのブロックに区切って、南から各ブロック毎に説明を進めたい。なお、主要遺跡の個々の検討は後述するので、ここではブロック全体に視点を合わせたい。

最初のブロックは国府から柳瀬川流域、つまり東の上遺跡までである。この間の距離は約10kmであり、東の上遺跡は国府のほぼ真北に位置し、東山道武藏路も国分寺を通過してここに至るとされている。東の上遺跡では、国府から続くであろう道路遺構の周辺に、柳瀬川流域では最も大きな集落が広がり、出土遺物からもこの地域の拠点ともなる遺跡であると考えられる。道路遺構の存在と集落の立地や規模からも、この遺跡が交通路の要衝に相当していたことは明瞭で、最近の調査では具注歴の書かれた漆紙の裏に、馬の戯画が発見された。

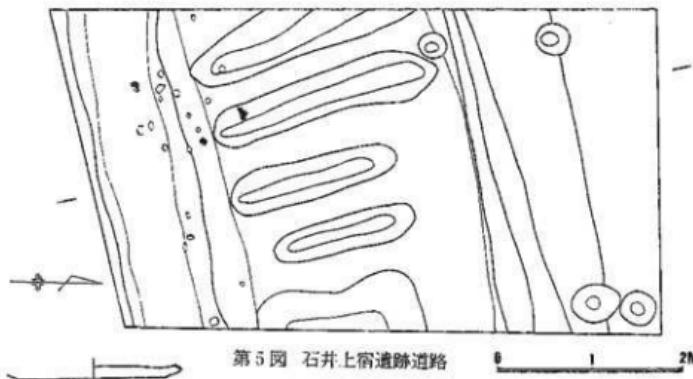
第2のブロックは東の上遺跡から越辺川までであるが、入間川に至るまでは平坦なローム台地が広がり、該期の遺跡はほとんど確認されていない。しかし、狭山市の入間川両岸には集落が連なるようにして分布し、入間川は入間郡と高麗郡の境になっている。右岸の揚竿木遺跡と左岸には宮ノ越遺跡・小山ノ上遺跡・今宿遺跡など大型の集落が多い。これらの集落からは、馬骨や馬具も出土しており、宮ノ越遺跡では入間川の方向に向かう道路遺構も調査されている。この集落の密集する地帯は、東の上遺跡を起点とすると從来の東山道武藏路のルートから20°程西にズレているが、さらに北に進むと小片川沿岸の光山遺跡群と女影庵寺・若宮遺跡に挟まれた地域に至る。女影庵寺を通って北上するルートは鎌倉街道上道と共に通している。川越市と日高市にまたがる光山遺跡群からは八世紀代の完形の馬具(轡)が出土しており、他の遺構・遺物からも一般集落とは違った様相を看取することができる。女影庵寺は高麗郡の郡守の可能性が高く、光山遺跡群との間には『南家』の墨書き

第3図 小山ノ上遺跡遺構図



が出土した新宿遺跡がある。ここから越辺川までは、西の丘陵に沿った高麗神社を始めとする寺院や遺跡群と、若葉台遺跡や脚折遺跡から勝呂庵寺までの台地上に展開する遺跡群が見られる。高麗神社周辺は高麗郡の中心と考えられてはいるが、官衙的な様相を持った遺構や遺物は検出されておらず、調査された集落遺跡も多くはない。東の脚折遺跡群の一・天狗遺跡では「郷」の文字が見られる漆紙文書が出土しており、また、若葉台遺跡は從来より入間郡衙の可能性を指摘されている。若葉台遺跡の一・角とも考えられる坂戸市の山田遺跡からは、「片牧」の墨書き土器、奈良三彩が出土している。さらに、勝呂庵寺の南に位置する宮町遺跡からは「路家」の墨書き土器、棹秤、コップ形土器が発見され、街道沿いの「市」を想定できるような集落である。越辺川の右岸には、対岸に鳩山窯跡群を控える古墳時代から連続する入西遺跡群があり、須恵器の流通や運搬などを考えると、この遺跡群は立地的にも重要な位置を占めるであろう。ここでは、入西遺跡群と鳩山窯跡群を重視して、脚折遺跡から入西遺跡群を通過し鳩山窯跡群に至るルートを考えたい。

第2ブロックのルートは東の上遺跡から北西に上り、入間川を渡河して宮ノ越遺跡に至り、さらに関山遺跡群から脚折遺跡・入西遺跡群へと続く。支線としては、水路も含めて入間川沿いに東金子窯跡群から霞ヶ関遺跡へ向かうラインが第一に、第二に馬貝の出土した毛呂山町伴六遺跡から大寺庵寺、高麗神社そして女影庵寺を抜けて光山遺跡群、さらに小畔川・入間川沿いに霞ヶ関遺跡へのルートが想定できる。第三には脚折遺跡から若葉台遺跡、さらに勝呂庵寺と宮町遺跡に抜ける重要な路線の存在が考えられる。このルートは越辺川の水路利用の拠点であると共に、渡河して低地を通り、大宮台地へと向かう陸路の要衝でもあったのである。



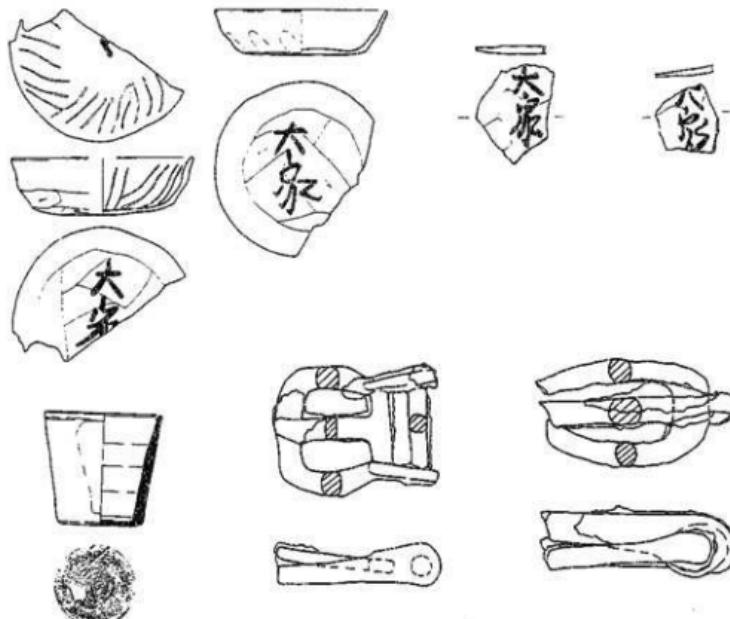
第5図 石井上宿遺跡道路



第6図 山田遺跡墨書き土器

第3のブロックは入西遺跡群から荒川までであるが、2番目のブロックに比べると丘陵地帯に入るため平坦な道は少なくなり、遺跡密度も低くなる。関連する遺跡としては、馬具の出土した東松山市岩の上遺跡と江南町寺内廃寺が距離を置いて存在する。寺内廃寺から西に大きく折れて荒川沿いに進むと男衾郡衙推定地で、対岸には製鉄遺跡の台耕地道跡があり、この周辺を渡河地点に当たるよう。ここから5km程上流には末野窯跡群が存在し、第2ブロックの鳩山窯跡群と類似した状況にある。鳩山窯跡群の製品の搬出については越辻川→荒川と下り、東京湾に出てから今度はさらに多摩川を遡って、国府・国分寺へ至るルートが、陸路以上に重要なルートであったと考えられる。鳩山窯跡群は比企郡で入西遺跡群は入間郡に所属するが、両遺跡は郡を越えて密接な関係にあり、鳩山窯跡群の規模からは整然とした港の施設を考えることもできる。

最後の第4ブロックは荒川から上野国までの間で、特に松久丘陵から本庄台地にかけて多くの遺跡を見る事ができる。荒川を渡ると八高線に沿って北西に進み、美里町大仏廃寺を西に見て那珂郡衙推定地の古郡地区に出る。この東には鎧や鉛などが出土した北坂遺跡と、その谷を挟んだ南には瓦塔と建物群が検出された甘柏山遺跡群が所在する。この丘陵地帯を過ぎて独立丘陵の間から本庄台地に下りると、女堀条里を控えた本庄市・児玉町将監塚・古井戸遺跡が広がる。この遺跡は「大家」の墨書き土器、馬具、コップ形土器などが検出された大規模な集落で、私はこの遺跡を郷の役所である郷家ではないかと推定している。この北には賀美郡衙推定地と考えられる嘉美的地名が



第7図 将監塚・古井戸遺跡出土遺物

残り、鎧や溝持ちの建物が発見された今井遺跡群も隣接している。また、西2km程には馬骨や瓦が出土し、寺院的な様相も伺える神川町白樹原・檜下遺跡も所在し、有力な遺跡群が展開する地域である。

白樹原・檜下遺跡を約3km北上すると、上里町中堀遺跡に至り、九世紀から十世紀にかけての大規模な集落と寺院の存在、そして中国唐白磁を始めとした希少な遺物の出土はこの遺跡の特異性を表している。また、大量の灰釉や綠釉陶器の存在は、施地である東海地方との有力な流通経路と豊富な財源を持った豪族の存在が考えられるであろう。中堀遺跡の西には時期は遅るが、八世紀の寺院である五明庵寺を指呼の間に望むことができる。五明地区は神流川を挟んで上野国と対峙し、この周辺を渡河し北上すると上野国府・国分寺へと至ることができる。

第4ブロックの支線としては、やはり荒川を利用した水路の存在が注目でき、末野窯跡群の須恵器や瓦の運搬には専ら水路が利用されたことであろう。ここも鳩山窯跡群と同じように、荒川から東京湾そして多摩川ルートが想定できるだろう。また、那珂郡衙推定地の古都から志戸川に沿って北東に行くと、後榛沢遺跡群と六反田遺跡、さらに台地に沿って南下すると榛沢郡衙の正倉である中宿遺跡へと続き、郡衙を結ぶ路線を推定できる。中宿遺跡は現在の福川の源流部に面しており、平坦な台地奥部ではなくこのような傾斜面に占地したことは、小河川であろうともここから妻沼低地を下る水路の存在を十分に意識したものであろう。中宿遺跡のやや台地奥部には馬具が出土した白山遺跡が所在し、台地縁辺に沿った陸路も考えられる。

### 3 沿線集落の性格について

交通路や流通・交易に関連した遺物を出土する遺跡と、官衙・寺院などを結ぶルートを主要生活道として図に示した。沿線の遺跡の多くは、当然のように農業を主要な生業としている集落であるが、前述したように街道沿いの集落と呼べるような特性を具备しているものも多く、ここでは、このような特徴を持ったいくつかの集落を検討したい。

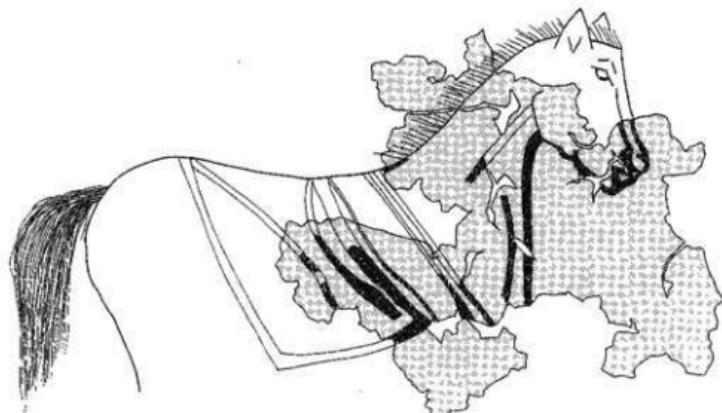
#### 東の上遺跡

柳瀬川右岸の台地上に広がる遺跡で、昭和50年以来50数次に及ぶ調査が実施され、奈良・平安時代の堅穴住居跡220軒と掘立柱建物跡20棟などが確認されている。注目すべき遺構には、前述したように東山道武藏路と推定される幅12mの道路跡や、小型ではあるが総柱の建物群などがある。遺物では、帶金具、馬骨、馬具、炭化米、円面鏡、そして最近の調査で具注歴の裏に馬を描いた戯画の漆紙文書が出土している。以前からこのような遺構・遺物から東の上遺跡を入間郡衙に比定する考え方もあるが、郡衙に相応しい明確な企画性を持った建物群や、より有力な手掛かりとなる遺物がなく、現状では確定はできない。しかし、これまでの成果を見ても、この遺跡が武藏国府・国分寺を北上して到達する最初の規模の大きな遺跡であり、遺物から連想できる文字・官位・倉庫や道路と馬の存在からは官衙的な様相も看取できる。駅とするには国府からの距離が標準的な駅間の距離16kmには短いが、馬に関する遺物が多いことから、駅あるいは牧的な性格を持った施設と、これを中心に発達した集落とは考えられないであろうか。位置的には入間郡の南端で、国府とも近い距離にあり、東山道武藏路と柳瀬川を利用した水路との交差点にも相当する。このような立地を多目的に

活用したことを想定すると、物資の集積地や郷倉の存否も考えられ、あるいは入間郡最南端の郷の役所である可能性を指摘できよう。なお、天長十年(833)に人間郡と多摩郡の境に設置したとされる悲田処の位置についても、東の上遺跡周辺に求めることができる。

#### 宮ノ越遺跡

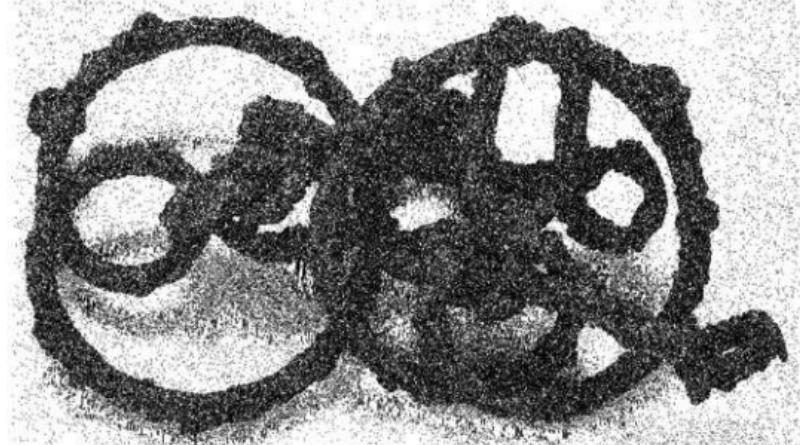
入間川左岸の台地上に連なるようにして分布する遺跡群の一つで、調査された遺跡だけでも、宮ノ越遺跡から南の宮地遺跡まで約5kmにわたり、さらに上流には東金子窯跡群があり、ほぼ同時期の遺跡が連続している。ここでは、宮ノ越遺跡を中心としてこれらの遺跡群を含めて検討しておきたい。宮ノ越遺跡では、馬に関するものには馬骨・馬齒・馬具と鈴が出土しており、特に鈴については報告者は馬鈴と考えて(駒見1982)、遺跡の性格を駅的であると指摘している。さらに側溝を持った幅3.5mから約6mの道路構造は、入間川と直行するように検出されている。小山ノ上遺跡では(中村1988、小渕1988)、台地の縁辺部で東西50mに渡って柵列が確認され、馬具の他に帶金具や円面鏡そして遺跡の地名とも一致する『小山』の墨書き土器が出土している。また、漆状の付着物のある土器の存在にも注目したい。小山ノ上遺跡から約1km上流の今宿遺跡では、48軒の竪穴住居跡と『三宅』の墨書き土器が検出されている。入間川左岸では、今宿遺跡の5km上流には東金子窯跡群が分布しており、小山ノ上遺跡の対岸には、皇朝十二銭などが出土している揚竿木遺跡がある。このように両岸に集落が展開し、馬の存在を肯定できるような遺構や遺物からは、東金子窯跡群を起点とした水路の設定と、陸路との十字路を考えることができる。因みに東の上遺跡から宮ノ越遺跡までの距離は、武藏国府～東の上遺跡間とほぼ同じ12kmで、南から進むと渡河をした地点である点でも一致している。宮ノ越遺跡を中心とした遺跡群については、官衙的と即断できる状況証拠はないが、交通の要衝にあって駅や牧のような機能を有した集落で、宿場や市といったイメージを浮かべることができる。さらに、小山ノ上遺跡、宮ノ越遺跡、今宿遺跡などは強い関連を持ちつつ各自独自の機能を有し、各遺跡に機能を分散していたとも考えられる。



第8図 東の上遺跡出土戯画復元図

### 光山遺跡群

小野川左岸の低位と高位の二段の台地に及び、住居は時期が新しくなるにつれ台地を上っていく傾向にある。小野川の上流には若宮遺跡・女影廻寺が、さらに西には高麗神社が鎮座している。七世紀中頃から八世紀後半までの集落であるが、古墳時代を含む集落としては高麗郡の中心となる日高市で初めての発見である。50軒以上の竪穴住居跡とこれに近い数の掘立柱建物跡が検出され、多くの墨書き土器と転用瓦、漆の付着した土器などが出土している。特に八世紀中頃の竪穴住居跡の床面から出土した馬具(轡)は、大型で完形であり、古墳時代からの系譜や国内での類例は少ない。隣接して井戸や簡仕切のある特殊竪穴、区画溝があり、馬具だけでなく馬の存在も考えられる。他にはコップ形土器、鉢前の鍵、「製」と坦摩ではないが『馬』と読める墨書き土器がある。また、光山遺跡群の北の台地東部にある新山遺跡では古代に遡るであろう、側溝を伴った道路遺構が発見されている。高麗郡という特殊な郡にあるこの遺跡は、立地やコップ形土器、漆などからは流通・交易の拠点が、鍵や「製」の墨書きからは政治的・宗教的な性格を想定できる。さらに、大型の轡は軍用馬に装着した可能性が高く、軍事的色彩をも感じができる。おそらくは渡河地点に発達した集落であろうが、時期的に平安時代までは轡繞せず、衰退についてもルートの変更などが大きく関わっているのであろう。



第9図 光山遺跡群出土馬具

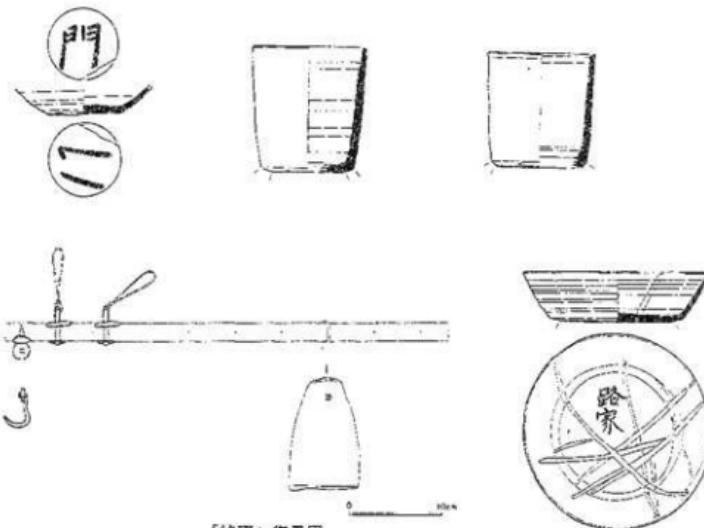
### 入西遺跡群

越辺川右岸に位置する稻荷前遺跡(富田1992)を中心とした遺跡群で、北には入西条里が広がり、対岸の丘陵には鳩山塚跡群が展開している。六世紀末から十世紀まで継続する集落で、官衙的・寺院的といった特徴的な遺構・遺物は少ないが、多様な要素を内包した大規模な集落と言えるであろう。このなかでは、『大里郡』、『入問郡』の墨書き土器や円面鏡、帶金貝、コップ形土器あるいは企画性を持った掘立柱建物跡群などが注目できるが、最大の特徴は鳩山塚跡群との地理的な関係である。

鳩山塙跡群の丘陵側には大きな集落は発達せず、対岸で郡は異なるが宮跡に最も近い大規模な集落として、その占める位置は重要である。つまり、単なる須恵器の消費地としてではなく、その流通や生産に大きく関わっていたと考えることができ、越辺川の水路と渡河して鳩山塙跡群を通過する陸路との十字路に相当したと想定できる。光山遺跡群からは約7km、宮ノ越遺跡からは11km程で、この距離は武藏国府～東の「遺跡と東の上遺跡～宮ノ越遺跡の各距離約12kmに近い。

#### 勝呂遺跡群

勝呂廃寺を中心として、やや広い範囲であるが宮町遺跡、住吉中学校遺跡なども含めて述べてみたい。勝呂廃寺周辺も古墳時代から発達した地域で、勝呂廃寺自体も七世紀後半から十世紀に及ぶ長い寺院として知られている。石井上宿遺跡は勝呂廃寺の西400mほどにあり、東西に走る幅4mの側溝を持つ道路が確認され、道は勝呂廃寺に向かっている。勝呂廃寺と1km離れている宮町遺跡(大谷1991)では、コップ形土器、「路家」の墨書き土器、石製おもりを持つ棹秤、隣接した住吉中学校遺跡では鉄製おもりと特徴的な遺物が多く、特に「路家」は交通路に關係する施設の存在を示唆するものとして注目できる。コップ形土器や棹秤は、この遺跡が交易・流通が盛んであったことを物語っており、各地の物資が集積され市が開かれるような集落であったと考えられる。越辺川とはやや離れているので(約2km)、ここを渡河地点とはできないが、脚折遺跡、若菜台遺跡から勝呂廃寺を通過して宮町遺跡に至り、ここから川へ下る道を予想したい。



「棹秤」復元図

第10図 宮町遺跡出土遺物

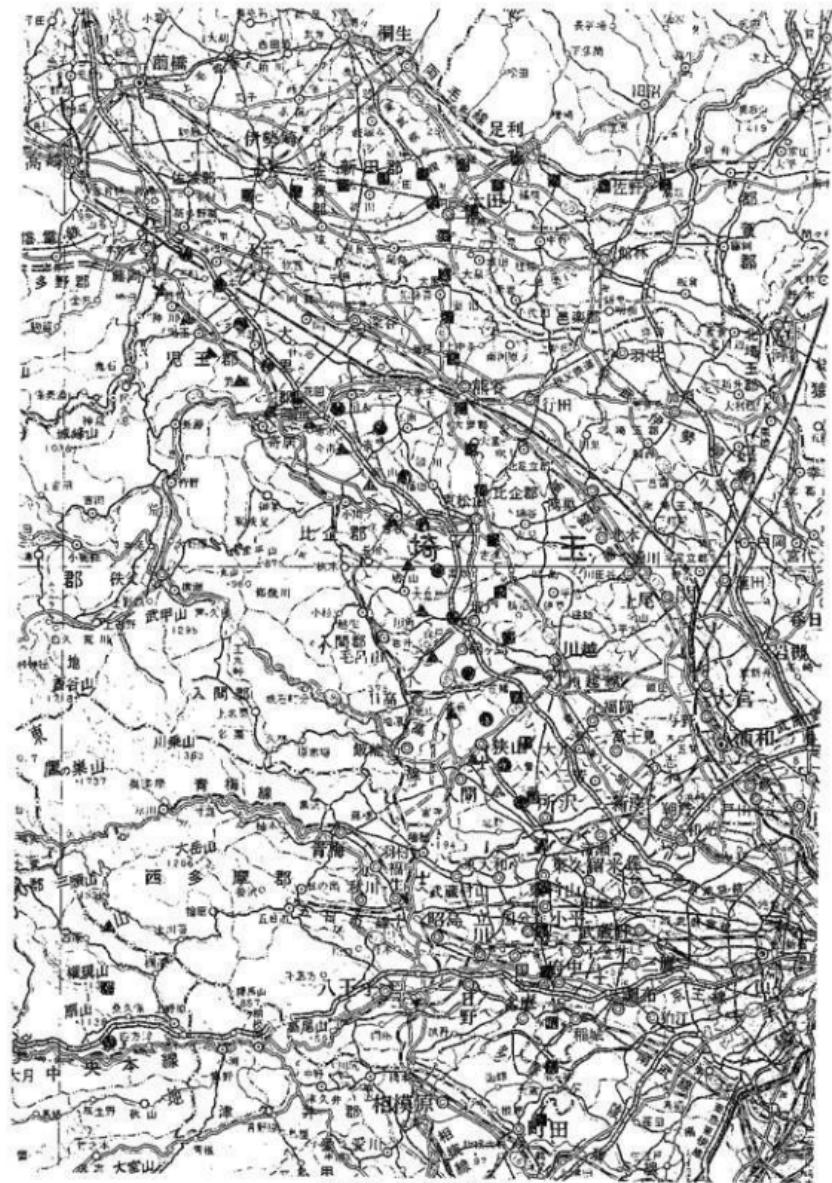
### 中堀遺跡

上野国と接する賀美郡のほぼ中央の扇状地に位置し、現在も調査中であるが既に300軒を越す堅穴住居跡が確認されている。周辺には五明庵寺、式内社今城青坂福神社や若宮台遺跡などが分布している。中心となる時期は平安時代であるが、青磁などの中世遺物も出土しており古代から中世に及ぶ数少ない遺跡でもある。この遺跡の大きな特徴は、二重に囲まれた堀の内側に3基の基壇が並び、外側に集落と大規模立柱建物跡群が広がることで、他に工房跡や井戸、区画溝、道路などが調査されている。遺物については、質量共に陶磁器に注目でき、綠釉陶器では香炉、陰刻花紋のある段皿や綠釉絵紋の段皿などが、灰釉陶器では「加」の墨書のある皿、内側に金箔を貼った皿と埼玉県内では初見の中国産の白磁が出土している。この他の遺物では、鬼瓦を始めとした瓦類、火燐斗、石帯、皇朝十二銭、馬齒・馬骨、おもり、羽口などの製鉄関係遺物と豊富で、墨書き器などの文字資料も増えつつある。中堀遺跡の性格については、以前は「加」の墨書から賀美郡との関係が指摘され、賀美郡史説も有力であった。最近の調査では鬼瓦や基壇などが発見されたことで、寺院の可能性も有力視されるようになった。しかし、現在の成果からは、寺院だけでなく寺院をも取り込んださらに大きな施設があるようで、都市計画された区画の内の一帯に寺院があると考えた方がよさそうである。滋賀県今津町日置前遺跡(今津町教委1984)でもいくつかのブロックによって大きな遺跡が構成されているが、これと同様な構造が考えられよう。現状では寺院・集落を伴った莊園や、将来武士團を形成するような有力豪族の居館をイメージしておきたい。

陸路のルートとしても、自樹原・檜下遺跡から中堀遺跡を通り若宮台遺跡と五明庵寺の間を抜けると、もうそこは国境である神流川で、対岸には上野國を望むことができる。上野国を横断する東山道を経由して運ばれてきたであろう中堀遺跡の多量の陶器からは、ここを通過するルートが東山道本道に近く、また、かなり有力で本格的な道路であったことを示唆している。

## 4 官道と生活道路

これまで、馬の存在や流通・交易に関連すると思われる遺構・遺物が検出された遺跡を基本に、主要生活道路とその支線という用語で交通路の復元を試みた。その想定路線は2図のとおりで、中世の鎌倉街道に近い丘陵沿いのルートが浮かび上がった。また、日本地名大辞典・埼玉県の参考地図(小野他1980)にある、奈良期の主要路(上野信濃越後本道)も數ヵ所で鎌倉街道と交差しつつ、丘陵沿いの道を指向している。今回の推定路と鎌倉街道、推定東山道武藏路とを比較するために、11図を作成したのでその違いがわかるかと思う。今回の目的は副題のとおり集落を結ぶ道路の復元であるが、この図のとおりこれは從来推定されていた東山道武藏路とは東の上遺跡から西に大きく外れ、東山道との分岐点では30km程の差が見られる結果となった。武藏路自体が推定であるため、これと比較するには推論がさらに増加するが、一般的の流通などには今回のルートが多用されたであろうことは、遺跡の分布が示す通りである。官道と生活道路とはその目的も規模も異なるが、低地をより多く通過する從来の説の武藏路は、II状のままでは通行は困難であると思われ、通常の使用に耐えうる道路とするには、かなりの造成と道整備が必要であったことは想像に難くない。特に妻沼低地は、現在では冬でも水分を多く含む水田地帯で、道路は水田面よりかなり高くてあるのが一



第11圖 各路線比較圖

般的である。荒川を越え利根川の両岸の10km以上がこのような低地であり、多少の造成では馬はもちろん人の通行さえも困難を伴うであろう。丘陵部に沿った今回の復元ルートは、これと比較してかなり安定しており、切り通しなどの造成は必要であったであろうが、険しい山地や雨期に通行が不可能になるような部分は少ないといえる。

官道建設の目的が岡府や郡衙を結ぶためのもので、武藏路については軍事目的を念頭に建設されたことは、これまでにも指摘されており、また、直線を基本としていることは、各地の調査によって確認されている。このような、集落と集落を結ぶことを前提として建設された道路網ではなくても、東の上遺跡の例からも周辺に集落が発達しており、道路と集落の関係はここで言及する必要はないほどである。本来の目的によって建設された道路であっても、その機能が果たされなければいるほど人が往来し、沿線には物資が集まるような中継基地、あるいは機能維持のためのバックアップ施設が必要になるのが自然の姿ではなかろうか。これに対して生活道路は通常の活動のために自然に発達したもので、規模や環境さえ別にすれば時代に關係なく存在し、さらに人間だけが有するものでもない。しかし、このような道路ではあっても利用頻度や目的によって規模や構造はさまざままで、ここでは最も使用頻度の高い集落間の道路とこれに次ぐものを記したものである。

現在では調査の限界と多くの制約があるため、完全な線としての道路の調査は困難であるが、各地の遺跡で道路遺構の発見は増加している。遺構としての認識も高まっているので今後さらに多くの調査で確認され、より詳細な検討も進められていくことであろう。

### おわりに

今回は古代交通路のうち、特に集落間を結ぶ道路について主要生活道という用語を使用して概観的に述べてみた。ここでは時期的な問題についても、大きく奈良・平安時代というような扱い方をしたが、実際の集落の盛衰を調べると、交通路の変更などと有機的な関連をもっている様相もいくつかの遺跡で看取ることができた。しかし、交通路と集落の関係そのものの検討は始めたばかりで、推論に推論を重ねる状況であり、現状では交通路の変遷と集落の動態にまで及んで言及する資料と問題意識の蓄積が充分でなかった。集落時期については、その特徴を類型化して、I類 古墳時代～平安時代・II類 古墳時代～奈良時代・III類 奈良時代～平安時代・IV類 奈良時代・V類 平安時代として巻末の一覧表に掲載するに止め、今後の課題としておきたい。

本論に続く次回は、寺院と交通路の関係についての検討を予定している。

なお、本論をまとめるに際しては、日高市教育委員会の中平薫氏には相談相手になっていたいた。また、所沢市教育委員会の並木降氏と飯田充晴氏にはいろいろと御教示いただいた。文末ではあるがお礼を述べておきたい。

1993.9.30

本論の原稿提出後に、女堀遺跡と入間川の間に位置する、川越市八幡前・若宮遺跡から『驛長』の墨書きが出土したとの報道があった。これにより、この周辺に駅家の存在を指摘する声もあるが、第1次の資料である道路遺構や遺構としての駅家が検出されていない現在、武藏路のルートも駅家の位置も決定したわけではなく、1点の墨書きは資料の1つと考えて、遺構・遺物の検討を引き行なっていく必要があるだろう。

#### 引用・参考文献

- 荒井健治 「国府（集落）『域』存在の可能性について」『東京考古11』 1993  
 飯田充晴他 「東の上遺跡」所沢市教育委員会 1985他  
 飯田充晴 「道路整備方法について—埼玉県所沢市東の上遺跡の道路跡を中心にして—」『古代交通研究2』古代交通研究会 1993  
 伊藤康倫他 「下新田遺跡」新田町教育委員会 1992  
 井上尚明 「古代集落遺跡の再検討」「研究紀要5」埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989  
 井上尚明 「郷家に関する一試論」「埼玉考古学論集」埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991  
 今津町教育委員会 「今津町文化財調査報告書3」 1984  
 小野文雄他 「日本地名大辞典11 埼玉県」角川書店 1980  
 木下 良 「下新田遺跡で検出された古代道路の性格について」「下新田遺跡」新田町教育委員会 1992  
 木下 良 「古代交通研究上の諸問題」「古代交通研究 初刊号」1992  
 木本雅康 「宝龟二年以前の東山道武藏路について」「古代交通研究 初刊号」1992  
 駒見和夫 「宮ノ越遺跡」埼玉県遺跡調査会 1982  
 酒井清治 「武藏国内の東山道について」「國立歴史民俗博物館研究報告50」「研究紀要6」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993  
 板井 隆 「東山道・あづま道を中心とする道路遺構の考古学的特徴」「研究紀要6」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989  
 栄原永遠男 「奈良時代流通経済史の研究」塙書房 1992  
 武田佐知子 「古代における都と村」「日本村落史講座6 生活1」雄山閣 1991  
 立石盛詞 「女堀II・東女堀原」埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1987  
 村尾次郎 「律令財政史の研究」吉川弘文館 1961  
 森田 悌 「東山道武藏支路」「信濃45-6」1993  
 山里順一 「律令地方財政史の研究」吉川弘文館 1991

#### 埼玉県交通路関連遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	種類	時期	関連する遺構・遺物と遺跡の特徴
1	五明院寺	上里町	寺院	III	
2	中堀遺跡	上里町	集落	V	馬骨・馬歯・おもり、道路、寺院、南家
3	鳥居原・橋下遺跡	神川町	集落	IV	馬歯・馬骨
4	押留谷・古井戸遺跡	本庄市・児玉町	集落	IV	馬具、『大家』、計量器
5	—	上里町	郡衙		賀美郡衙推定地
6	中宿遺跡	岡部町	郡衙	II	椿沢郡衙(正倉院)
7	北坂遺跡	岡部町	集落	V	鈴、縁(クリリ鍵)

No.	遺跡名	所在地	種類	時期	関連する遺構・遺物と遺跡の特徴
8	六反田遺跡	岡部町	集落	IV	馬齒
9	白山遺跡	岡部町	集落	IV	馬具
10	一	寄居町	郡衙		男衾郡衙推定地
11	米野窯跡群	寄居町	窯跡		
12	愛宕通遺跡	行田市	集落	V	おもり
13	岩の上遺跡	東松山市	集落	V	馬具
14	一	東松山市	郡衙		比企郡衙推定地
15	鳩山窯跡群	鳩山町	窯跡		
16	伴六遺跡	毛呂山町	集落	V	馬具
17	入西遺跡群	坂戸市	集落	I	計量器
18	山田遺跡	坂戸市	集落		「片牧」、奈良三彩
19	精進場遺跡	坂戸市	集落	V	おもり
20	勝呂庵寺	坂戸市	寺院	III	馬骨・馬齒
21	石井上宿遺跡	坂戸市	集落		道路
22	宮町遺跡	坂戸市	集落	IV	「路家」、棹秤、計量器
23	若葉台遺跡	鶴ヶ島市	集落	IV	馬具、帯金具
24	新山遺跡	鶴ヶ島市		V	道路
25	女影院寺	日高市	寺院	III	馬齒、若宮遺跡
26	向谷遺跡	日高市		V	道路
27	新宿遺跡	日高市	集落	IV	「南家」
28	光山遺跡群	川越市・日高市	集落	II	馬具(櫛)、計量器、「馬」
29	小山ノ上遺跡	狭山市	集落	IV	馬具、柵列
30	宮ノ越遺跡	狭山市	集落	IV	馬具、鉢、馬齒・馬骨、道路、計量器
31	今宿遺跡	狭山市	集落	IV	「三宅」
32	東金子窯跡群	入間市	窯跡		
33	東の上遺跡	所沢市	集落	I	道路、馬歎面、馬骨、馬具
34	弥勒遺跡	桶川市	集落		馬齒
35	水川神社東遺跡	大宮市		V	鉢
36	西地続田遺跡	草加市	集落	V	「南家」

# 研究紀要 第10号

1993

平成5年12月20日 印刷

平成5年12月25日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪884

☎0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社